

記念センター所蔵寄贈資料目録⑤

ポスト・ドクター 武井義和

今回は二〇一〇年度に寄贈された資料を紹介する。資料のリストは後に掲載するので、まずはそれぞれの資料について簡単に述べておきたい。

故青木光利氏に関係する資料として、中国技術研修生日本語弁論大会の様子を撮影した写真が新たに追加された。故青木氏は通産省退職後の一九八五年に、中国研修生を受け入れるための日中人材交流協会を立ち上げられたが、各企業での一年間の研修成果を日本語で発表する弁論大会が一九九〇年から二〇〇〇年までの一〇年間、愛知大学豊橋校舎で開催され、中日大辞典編纂処長の今泉潤太郎教授が審査委員長を務められていた。今回追加された写真は、その審査発表の光景である。なお、日中人材交流協会については『オープン・リサーチ・センター年報』四号掲載の拙稿「故青木光利氏寄贈資料について」を参照されたい。

落久保博明氏は二〇〇九年にも御祖父様にあたる落久保半一氏の書院二期生卒業アルバムを寄贈頂いたが、二〇一〇年には半一氏の卒業証書、賞状（いずれもコピー）のほか、一九〇八年の広島県告示「清国留

「学生規程」や『読史方輿紀要』、『天下郡国利病書』も寄贈頂いた。「清国留學生規程」は、各府県の東亜同文書院への呉費生派遣について考える際に大きな手掛りとなるものである。恐らく、半一氏が書院受験に際して参照されたものと思われる。また、『読史方輿紀要』、『天下郡国利病書』は半一氏の卒業成績が優秀であったため書院から贈られた記念品であり、立派な木箱に収まっているものである。『読史方輿紀要』は顧祖禹（一六三一〜一六九二年）が、『天下郡国利病書』は顧炎武（一六一三〜一六八二年）がまとめた地理書であるが、半一氏が東亜同文書院から贈られたものは、共に「光緒二十七年」（一九〇一年）に図書集成局から刊行されたものである。この写真は『オープン・リサーチ・センター年報』五号（二〇一一年）に資料紹介として掲載している。

多田徳茂氏と松山功氏からは、中村満津氏に関する写真を頂いた。多田氏と松山氏は親戚同士であり、中村氏が孫文の協力者だった山田純三郎と交流があったかもしれないとの事で、記念センターを訪問された際に頂いたものである。残念ながら現在のところ大きな手掛かりはないが、山田をめぐる人間関係を考える上で興味深い。

ハルビン学院出身の谷藤助氏は、記念センターが二〇一〇年七月に京都で資料展示会とあわせて開催した講演会「大陸にあった日本の高等教育機関と東亜同文書院」で、講演者のお一人として「ハルビン学院と私」という題でお話頂いた。その際、ハルビン学院の当時と現在の様子を示すパネルを九点準備された。会期中は講演会場と展示会場で展示したが、その後記念センターが拝受したものである。東亜同文書院と同様に、現在は存在しないハルビン学院の様子を知ることができる。

荒尾精書幅は、前述の京都での資料展示会・講演会の際に、金沢で書幅を発見された書院四二期生の三田

良信氏が金沢から会場まで直接ご持参下さったものである。三田氏によれば、日清貿易研究所が設立される一八九〇（明治二三年）頃に、学生勧誘のために日本各地を遊説した感想を認めたものであろうとのことだが、東亜同文書院の源流と位置付けられる日清貿易研究所の創立期における荒尾の書幅ということに大きな価値がある大変貴重なものである。なお、三田氏が書幅を発見された経緯、そして右記に挙げた書幅の解説、さらに書が残された金沢と荒尾とのつながりなどについては、ご自身が『同文書院記念報』VOL.18（記念センター、二〇一〇年）に記されているので、是非合わせてご一読頂きたい。なお、二〇一〇年秋に名古屋市のマツザカヤホールで巡回資料展示会・講演会を行ったが、テーマの一つに荒尾精を挙げていたため、その書幅も展示した。彼は幕末に尾張藩士の子として現在の名古屋市東区で生まれたため、地元名古屋で荒尾について広く知ってもらおう絶好の機会でもあった。書幅は非常に大きく迫力があり、また地元紙『中日新聞』でも紹介されたため、多くの見学者の注目を集めていたことを、合わせて記しておく。

書院四五期生の三好駿一氏夫人・初生氏からは駿一氏が所蔵されていた品を頂いた。滬友会名古屋支部会計簿は、かつて各地で開かれていた書院同窓会の様子を知ることができる資料である。また、東亜同文書院の記念手拭いや、滬友会製作の法被などは卒業後長年経っても母校を忘れていなかったことの証であり、書院生の意識を知る資料と位置付けられる。

三好駿一氏と同期だった武富健治氏からは滬友会名古屋支部会員名簿を寄贈頂いた。すでに物故者が殆どを占めるが、どのような職業についていたのか、何期生から何期生まで在籍していたのか、などを知る上で興味深い。滬友会名古屋支部会計簿とともに、戦後の書院生が日本の各地域でどのような暮らしをし、同窓

生としてのつながりをどのように有していたのかを知ることができる。

書院四一期生の富永貞夫氏夫人・静江氏は貞夫氏が大切にしておられた根津一院長の顔写真、手作りの根津一院長塔婆を寄贈頂いた。根津院長写真については静江夫人の書簡に、同窓会があるたびに飾って根津院長を偲んでいた様だと記されている。夫人の書簡から、貞夫氏は滬友会佐賀支部に所属されていた様なので、同支部の集まりの際に飾っていたと思われるが、根津院長の法名が書かれた手作りの塔婆の模型とあわせて、貞夫氏の根津院長に対する深い尊敬の念、さらに書院生の根津精神に対する強い尊敬の念を感じさせてくれる資料である。これらもやはり書院生の内面を知る上で重要な資料である。

末筆ながら、今回の目録に掲載した資料を寄贈下さった方々に、厚くお礼申し上げます。

なお、旧年亡くなられた三好駿一氏と富永貞夫氏のご冥福をお祈り致します。

注(1)『読史方輿紀要』については海野一隆「読史方輿紀要とその地域論」(『史林』三六一三、一九五三年)、『天下郡国利病書』については井上進「顧炎武」(白帝社、一九九四年)を参照した。詳細はこれらの文献をご覧頂きたい。

(凡例)

- (一) 年号は主に西暦で表記したが、元号で記した箇所もある。
- (二) 以前にも寄贈頂いた方の資料番号は、通し番号として登録している。
- (三) 歴史的な人物と位置付けられる人名については、敬称略となっている。
- (四) 「寄贈年月日」は資料が寄贈された日、もしくは記念センターに到着した日を示している。

No		日付	内容	差出人	受取人	寄贈者氏名	寄贈年月日
37	37-8		「中国技術研修生日本語弁論大会」の様子を撮影した写真（壇上に今泉潤太郎教授〔当時〕）			今泉潤太郎名誉教授より資料整理の委託	2010年秋
47	47-5		「清国留学生規程」（四十一年県告示第二十号）広島県の規程			落久保博明氏	2010年5月22日
	47-6	1915年6月27日	落久保半一の東亜同文書院卒業証書（コピー）			同上	同上
	47-7	1915年6月27日	落久保半一の東亜同文書院賞状（コピー）			同上	同上
	47-8		「商品目録」（47-7、47-9の関連資料）			同上	同上
	47-9		「読史方輿紀要」、「天下郡国利病書」二林齋校本			同上	同上
49	49-1		中村満津と女兒が写る写真			多田徳茂氏、松山功氏	2010年6月21日
	49-2		中村満津ら6名が写る集合写真計2部			同上	同上
	49-3		49-2のコピー（人名書き付）			同上	同上
	49-4		「同文書院記念報」VOL.4のコピー（中村泰吉氏らしき年賀状が掲載されたリストの箇所）			同上	同上
50	50-1		ハルビン学院関係パネル 計9点 ①ロシア文字の校名、②校旗、校長など、③昭和18（1943）年の校舎、④21期生集合写真、⑤21期生～24期生集合写真、⑥旧校舎（1991年8月）、⑦ハルビン学院記念碑、⑧記念碑収納品、⑨旧校舎と記念碑銘文			谷藤助氏	2010年7月1日

51	51-1	1890年頃	荒尾精書幅		三田良信氏	2010年7月17日
52	52-1		滬友会名古屋支部会計簿(昭和59～平成2年分)		三好初生氏	2010年9月17日
	52-2		上海交通大学ネクタイピン		同上	同上
	52-3		東亜同文書院創立百周年記念ネクタイピン		同上	同上
	52-4		東亜同文書院・愛大予科の記念手拭い計14点(書院12点、愛大予科2点)		同上	同上
	52-5		滬友会製作の法被 計3点		同上	同上
53	53-1	1987年6月1日現在	滬友会名古屋支部会員名簿		武富健治氏	2010年9月17日
54	54-1		富永静江氏の書簡		富永静江氏	2010年11月
	54-2		東亜同文書院記念基金会寄付申込書		同上	同上
	54-3		手作りの根津一院長塔婆 法名「精進院徹道一貫居士」あり		同上	同上
	54-4		根津一院長顔写真		同上	同上